

データ活用のポイントとソリューション

大 畠 幸 男 （おおはた ゆきお） ウイングアーク 1st 株式会社 Cloud 事業部 ビジネス戦略室 副室長／エバンジェリスト

要約 昨今、データの重要性が高まり、企業活動におけるビジネス上の意思決定や判断をデータドリブン型で進める企業は増加している。弊社ウイングアーク 1st は創業以来データ活用を中心としたビジネスにおいて、自社にてソフトウェアを開発し多くのお客様の課題解決を実現してきた。このデータ活用を実現するには、利用するデータやテクノロジーへの向き合い方だけでなく、環境面においても見落とされがちなポイントが存在する。本稿では、データ活用を実現するまでに意識しておかなくてはならない点を提示する。また後半では、弊社が提供するプロダクトのデータ活用における価値を述べる。

1. はじめに

「Data Empowerment」すなわち、“データとテクノロジーで人の価値を最大化し世界を変える”といった考え方にに基づき、弊社ウイングアーク 1st は、企業が目指すビジネスのゴールやそれを実現するための各種手段において、データ活用のあり方に関する提唱や、データ活用のためのソフトウェアを自社にて開発し、多くの企業へ提供することで、データドリブンのビジネススタイルを推進してきた。本稿では、データ活用の観点から、データとの向き合い方やデータドリブンを目指す上での環境作りと合わせ、弊社のデータ活用プロダクトを紹介する。

印が向いており、下の矢印はデータから課題へ矢印が向いている。上の矢印のように、まず課題を考え、その課題を解決するために必要なデータに向き合うことで、目的に対する適切な結果を得ることができると考える。

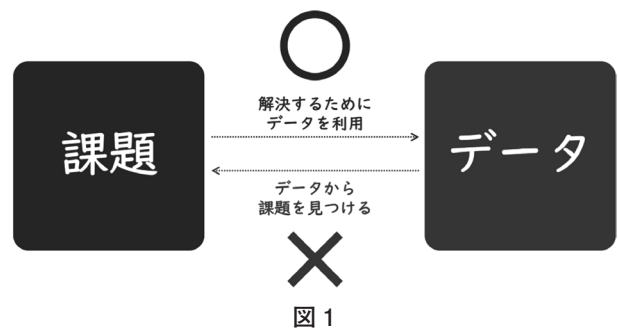
一方、下の矢印のように、データを様々な角度から分析することで、多くの気づきを得る事ができるかもしれない。しかしその場合、本来の課題に対する気づきを得られているかどうか分からないのでは無いだろうか。これにより、解決すべき課題発見に至らず、本来の目的とは異なるデータ活用の形となり、結果として BI ツール不要論が出始めることとなる。課題とデータの関係における矢印は、単純な絵で表現できるが、向きの違いにより得られる結果が大きく異なる点に注意したい。

2. データ活用のポイント

データ活用を検討する際、データ活用=BI ツールを利用することと考え、いきなりデータを BI ツールで参照することで目的に達する結果を得る、といった方向に向かうケースはしばしば見られる光景だ。その結果、その多くの場合が期待値にそぐわない形となる傾向が強い。これは、データへの向き合い方や技術先行型で解決しようとする流れが原因の一つとして考えられる。

2.1 データにどう向き合うか

図 1 で表すとおり、“課題”と“データ”の方向性が重要な要素となる。上の矢印は課題からデータへ矢



データへの向き合い方として、いくつかの例を図 2 に表現する。例えば、工場ラインの生産性が低いという課題であれば、生産性を上げる目的に対し、「設備稼働」「作業日報」「生産数」などのデータを利用する、営業現場の売上減少傾向であれば、売上予算の達成を目的とし、「予算」「売上」「訪問件数」などのデータ